

韓国学術図書翻訳出版事業 《韓国の学術と文化》シリーズ 全30巻刊行終了

韓国学術図書翻訳出版事業の成果として、法政大学出版局から刊行されてきた《韓国の学術と文化》シリーズが、2008年3月に全30巻の刊行を終了しました。

韓国学術図書翻訳出版事業は、日本政府の「平和友好交流計画」の一環として、1995年に事業を開始しました。当時、韓国の学術成果を日本語で紹介する図書は少なく、韓国・朝鮮を専門とする研究者以外の日本人がそれらに触れる機会のごく限られていました。そのため、韓国・朝鮮に対する日本の読者の知的関心に応え、長い目で見た日韓の学術交流に資する良質な学術書の翻訳が求められていました。

そこで、五十嵐暁郎立教大学教授と田中優子法政大学教授を選定委員とし、図書の選定が進められました。評価が定まった学術書のほか、当時の韓国での最新の研究の中で独自の視点を提示しているもの、まだ十分に日本で知られていない分野などを対象に、候補となる図書がリストアップされました。日本および韓国の幅広い専門家から意見を聞き取り、選定委員が実際に著者に面会して意見交換するなどして、翻訳図書が徐々に決定してい

きました。

これらの作業を経て、1999年3月に『韓国現代政治の条件』を皮切りに、法政大学出版局から《韓国の学術と文化》シリーズの刊行がスタートしました。出版が開始されたあとも選定の作業を並行して進め、最終的に全30巻でシリーズを構成することになりました。

《韓国の学術と文化》シリーズには、90年代を中心とする、人文社会科学分野の韓国の学術成果が多く取り入れられました。歴史を扱ったものが最も多く、文化、政治・外交、社会、経済、文学と、分野は多岐にわたっています。

また、大学に所属する研究者だけではなく、多様な立場の著者による文化研究の労作が何点か訳出されたこと



アジアの一国の学術書が日本でこれほどまとまって翻訳された例はない

も、このシリーズの特徴のひとつです。

これらの翻訳は、日本の代表的な韓国・朝鮮研究者が、多忙な研究の傍ら自ら手がけ、日本における韓国・朝鮮研究の優れた知見が訳文に活かされることになりました。その意味でも非常に貴重なシリーズといえます。

事業の開始から10年以上を経て、日本における韓国の学術書からの翻訳は質量ともに増加しましたが、現在でも商業ベースに乗りにくい学術書や文化書の翻訳は限られるのが実情です。本シリーズが日韓学術交流の財産として、長く読み継がれることを願っています。

選定委員のお二人より、シリーズ完結にあたって お言葉をいただきました

五十嵐暁郎 立教大学法学部 教授

「韓国の学術と文化」シリーズが計画されて以来、10年が経過した。完結の報に感慨深いものがある。「刊行のことば」で述べているように、このシリーズは、「韓国の歴史、社会、文化について、韓国の研究者によって書かれた第一級の学術書の翻訳」である。田中優子法政大学教授と私は、選書のために隣国の多くの優れた研究者にお目にかかることができ、その際の会話を通じて、韓国の学術研究のダイナミックな展開を知ることができた。同時に、日韓間の学術交流がもたらす豊かな知的世界の発展を確信したのである。

あらためて見渡す30巻のリストは、堂々たる構成、魅力的な内容である。ここに隣国理解の礎石が据えられた、という思いがわいてくるとともに、刊行に携わられた翻訳者、編集者の皆様の大変なご苦労がしのばれる。心より感謝申し上げる。「刊行のことば」はまた、「この企画は、関わりの難しさを抱えていたこれまでの世代から、新たな関わりを築く次の世代へ向けて多くの経験と知見とを受け渡すことを目的としています」と述べている。本シリーズが刊行されて間もなく、そのうちの一冊が博士論文に引用されているのを見出して、早くも成果が現れたのを喜んだ。完結を機に、あらためて日本社会に韓国の学術、文化に対する強い関心が生み出されることを願っている。

田中優子 法政大学社会学部 教授

このたび、合計30冊にわたる「韓国の学術と文化」シリーズが完結した。1999年から2008年まで、10年の道のりだった。ご尽力くださった日韓文化交流基金と法政大学出版局には、心から感謝したい。

1996、7年ごろだったろうか。外務省と日韓文化交流基金から、このシリーズの選定を依頼された。日本学の立場から見渡してほしいということで、私が文化関係を、五十嵐暁郎先生が政治関係を担当することになった。選定候補のリストアップは韓国研究諸分野の専門家の助言でおこない、専門家からの推薦で幾度も韓国に足を運び、著者とお目にかかった。そのすべての過程を、日韓文化交流基金の有能なスタッフが担ってくださった。シリーズ刊行が決まったあと、二つの点で困難があった。一つは出版社である。出版助成があったにもかかわらず、「リスクが大きい。韓国はこれからどうなるかわからない」と言われた。まだ韓国ブームもなく、日本の韓国観は安定していなかったのである。それを、先見の明がある法政大学出版局が引き受けてくださった。

もう一つの困難は翻訳者である。これだけのシリーズを一挙に訳すには人数が足りなかった。しかも重厚な専門書である。多くの方々がまさにこつこつと地道な仕事を続けながら、この道のりを歩いてくださったのである。

今後は本の紹介やキャンペーンの機会を持ちたい。出すだけで終わるのではなく、広めてゆく時期に入ったのである。

《韓国の学術と文化》シリーズ 刊行図書一覧

- 1 『韓国現代政治の条件』(崔章集著、中村福治訳)
- 2 『朝鮮王朝社会と儒教』(李泰鎮著、六反田豊訳)
- 3 『日清戦争期の韓国改革運動－甲午更張研究』
(柳永益著、秋月望・広瀬貞三訳)
- 4 『私の文化遺産踏査記Ⅰ－南道踏査一番地』
(俞弘濬著、大野郁彦訳)
- 5 『私の文化遺産踏査記Ⅱ－山は川を越えられず』
(俞弘濬著、宋連玉訳)
- 6 『私の文化遺産踏査記Ⅲ－語らないものとの対話』
(俞弘濬著、大野郁彦訳)
- 7 『朝鮮近世の御用商人－貢人の研究』
(金東哲著、吉田光男訳)
- 8 『韓国の近現代文学』
(李光鎬編、尹相仁・渡辺直紀訳)
- 9 『韓国環境運動の社会学』
－正義に基づく持続可能な社会のために』
(具度完著、石坂浩一・福島みのり訳)
- 10 『韓国社会とジェンダー』
(趙惠貞著、春木育美訳)
- 11 『市場の社会史』
(鄭勝謨著、朝倉敏夫監修、林史樹訳)
- 12 『韓国近現代農業史研究』
－韓末・日帝下の地主制と農業問題』
(金容燮著、鶴園裕訳)
- 13 『春香伝の世界－その通時的研究』
(薛盛璟著、大谷森繁監修、西岡健治訳)
- 14 『韓国の歳時習俗』(張籌根著、児玉仁夫訳)
- 15 『黄金の海・インモチの海』
－韓国西海岸歴史民俗探訪』
(朱剛玄著、黒澤真爾訳)
- 16 『韓国経済通史』
(李憲昶著、須川英徳・六反田豊監訳)
- 17 『韓国政治のダイナミズム』
(韓培浩著、木宮正史・磯崎典世訳)
- 18 『韓国仮面劇－その歴史と原理』
(田耕旭著、野村伸一監訳、李美江訳)
- 19 『韓国経済発展のダイナミズム』
(趙淳著、深川博史監訳、藤川昇悟訳)
- 20 『韓国の民家』
(申栄勲著、金大壁写真、西垣安比古監訳、
李終姫・市岡実幸訳)
- 21 『朝鮮民族解放運動の歴史』
－平和的統一への模索』
(姜萬吉編著、太田修・庵道由香訳)
- 22 『ソウルにダンスホールを』
－1930年代朝鮮の文化』
(金振松著、川村湊監訳、安岡明子・川村亜子訳)
- 23 『韓国の藁と草の文化』
(印炳善著、宮崎清監修、朴燦一・尹明淑訳)
- 24 『朝鮮村落社会史の研究』
(李海濬著、井上和枝訳)
- 25 『朝鮮後期の郷史』(李勛相著、宮嶋博史訳)
- 26 『現代韓国の地方自治』
(趙昌鉉著、阪堂博之・阪堂千津子訳)
- 27 『朝鮮後期漂流民と日朝関係』
(李薫著、池内敏訳)
- 28 『韓国外交政策の理想と現実』
－李承晩外交と米国の対韓政策に対する反省』
(李昊宰著、長澤裕子訳)
- 29 『朝鮮朝宮中風俗の研究』
(金用淑著、大谷森繁監修、李賢起訳)
- 30 『韓国家族制度の研究』
(金斗憲著、李英美・金香男・金貞任訳)

「コミカル&シニカル」展覧会とセミナー

韓日女性の視点による現代写真展実行委員会 事務局長 中西 美穂

後進を育てる企画を女性の視点で

韓国・坡州市で開催された韓日写真作家交流展「コミカル & シニカル (2008.2.16～3.7/ギャラリーチヂヒャン)」は、写真家パク・ヨンスクから2006年4月に届いた一通のメールにはじまる。内容は「後進を育てる日韓写真作家交流展を女性の視点で企画しましょう」とあり、「日程は2006年中、会場は大阪、ディレクターはキュレーターの綾智佳さん」とかなり具体的だった。日本女性に人気の高い韓流ドラマでは、韓国の生の現代文化をうかがい知ることはできない。パク・ヨンスクの提案は、日本でほとんど知られていない韓国の若い表現者を紹介することになる。しかも日本の若手との交流展を女性の視点で立ち上げることは、政治や経済のように男性の視点で進められてきた両国の歴史の中に、新しい動きをつくることになるのではないか。絶対に面白くなると直感した。幸いにも綾に加えて、写真研究者の小林美香、在阪の男女共同参画施設職員の仁科あゆ美と、企画仲間を得て、2007年1月に大阪で展覧会が開催された。同展は好評で、1年後に韓国で開催しようと意気込み、企画を練った。

韓国での展覧会開催まで

大阪展終了後すぐ「展覧会を韓国で2008年1月にしましょう」と、パク・

ヨンスクにメールをした。返ってきた答えは意外にも、「ちょっと待て」。次は中国も入れた三か国の企画を考えており、まだ準備が整っていない、と。そこで「協働企画なのに、大阪の展示だけでは、こちらは単に受け入れ団体になってしまう。是非、韓国で展示したい。三か国の企画はその後でいいのでは」と、こちらの考えを提示した。パク・ヨンスクとキュレーターのハン・グミョンは理解を示し、韓国での本格実施に向け動き出した。しかしながら、日程などの詳細が決定したのが開催のなんと37日前！そして、いったん決まったら、ダイナミックにどんどん進んでいく。計画を少しずつ固めていく日本のやり方との違いに戸惑いは大きく、日本作家の日程調整には大変苦慮した。

展覧会設営作業にも戸惑いがあった。韓国の作家は、事前に会場を見学済みなのか迷いなく設置を進める。また、ほとんどの作品が額に入っており作業も壁に掛けるだけと簡単だった。しかし、日本の作家は、会場写真や見取り図を事前に見ていても実際に来るのはこの時がはじめてのため、どのように展示するのか、瞬時の判断が求められた。しかも、どの作品も額に入っておらず、壁にレイアウトしながら直接貼っていくなどの実験的な表現ばかりだった。結局作業は展覧会前夜の真夜中過ぎにまで及び、セントラルヒーティングが切れ、底冷えする会場でコートを着込んで仕上げた。

東アジアから
新しい動きをつくろう

韓日それぞれ7名、合計14名の作家が参加する韓日写真作家交流展は、展覧会だけに止まらず、アーティストダ



実験的な作品と額に入った写真が混在する展覧会会場

イアログ、日韓中の評論家ら8名が語るシンポジウムも同時開催され、本格的で意義深い催しとなった。

当初、社会性の強い韓国作品に、日本の作家は違和感を覚えていた。しかし作家同士が、撮影の工夫や苦勞など共通の課題を発見し、また作品テーマに扱われている自身の経験に基づく文化……植物、宗教儀礼、家族、建物、街の風景、歴史などを話題とした雑談が自然発生し、個別に連絡先を交換しあい、作品制作に協力しあう約束をした者もいる。

ハン・グミョンは「両国の写真は、異質な感覚、社会・文化的現象に対する探求姿勢の違いなど、対比されることも多いが、結局は非西欧的で『アジア』的な地域性や意識を共有している」と語る。

両国の現代表現は、表面上は違いを感じるが、深く知れば共通項も多い。ハンやパクと別れ際に、「東アジアから新しい写真の動きをつくろう」と約束をした。今度はどちらからのメールがきっかけになるのだろうか。

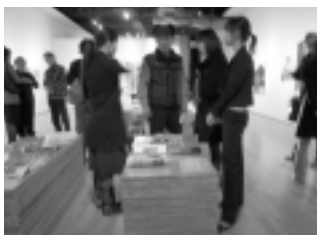
PROFILE

なかにし みほ



NPO大阪アーツアボリア代表理事。築港赤レンガ倉庫(2000-2006)、大阪市立大学医学部附属病院(2004-)、山本能楽堂(2007-)などでアートプロジェクトを企画運営。平成19年度国際交流基金知的フェローシップ(派遣)。

オーブニングパーティーには著名な写真家もやってきて世代間の交流も行われた



舞台芸術見本市における日韓交流 「東京芸術見本市2008 Korea Japan Meeting」

東京芸術見本市事務局 プログラム・オフィサー 久保田 夏実

ソウルと東京 見本市同士のつながり

モーターショーやブックフェアのように、車や本ではなく、演劇・ダンス・音楽などの舞台芸術作品を対象とした見本市があります。東京芸術見本市、Tokyo Performing Arts Market（以下、「TPAM」）は、舞台芸術の見本市で、ブースの出展や実演を見せるショーケース、映像による作品紹介などのプログラムで構成されています。演劇やダンスなどアーティストの作品を観客へと提供する制作者＝「プレゼンター」のための催事で、今回で12回を迎えます。このような舞台芸術の見本市は、モントリオールやニューヨーク、シンガポール、上海、そしてソウルなどの世界各地で実施されています。

ソウルの舞台芸術見本市、Performing Arts Market in Seoul（以下、「PAMS」）は2005年の秋からスタートしました。日本と韓国という距離が近い国同士であること、それぞれの組織の代表が既知の関係だったことなどがあり、翌06年より、PAMSとTPAMとの間で、1. 劇場のプロデューサーやフェスティバルのディレクターをお互いに見本市へ派遣する人的交流を行う、2. 実演であるショーケースをお互いに見本市で上演すること、を2本の柱として提携関係を結びました。この提携関係は06年度から始まり、07年度からは芸術団体とプレゼンター

のミーティングを行うこととしました。

出会いから広がるネットワーク

本年、TPAMは3月5日（水）から8日（土）まで恵比寿ザ・ガーデンホール／ルームを主会場として開催されました。4日間の日程のなかで、初日である5日の午後に、韓国のプレゼンターと日本の芸術団体と日韓舞台芸術ミーティング「Korea Japan Meeting」を設け、8日のショーケースでシアター・ムーリー（Theatre Moollee）の『レディ・マクベス』を上演しました。

5日の「Korea Japan Meeting」に参加したのは、ハン・ソンスクさん（国際モダンダンスフェスティバル・芸術監督）、チョン・ヒョンウクさん（WONDER SPACE・CEO）、チェ・ヨンフンさん（アルコアーツシアター・芸術監督）の3名のプレゼンターと9つの日本の芸術団体です。既に、3名の方のプロフィールを参加団体にはお送りしていたので、簡単に自己紹介をして頂いた後、早速、各団体のプレゼンテーションに入ります。10分という持ち時間のなかで、作品の映像を投影しながらプレゼンテーションをすするシンプルな形式です。団体の多くはこれまでの活動などをまとめたプレスキットを手渡したり、この時期にちょうど行っている公演も併せて紹介をしていました。予定していた時間を超えての長丁場になってしまいましたが、プレゼンターのみなさんはすべてのプレゼンテーションを真剣な面持ちで聞き、疑問に思った点は質問をしていました。

ミーティングの翌日には参加した音楽団体とチョン・ヒョンウクさんがさ



プレゼンテーションに聞き入る参加者

っそく個別のミーティングを行い、ソウルでの公演の可能性を話し合っていました。コラボレーションの相手や場所のイメージなどを話しながら、アイデアはどんどんふくらんでいき、現在、メールなどを通してコミュニケーションを続けています。また、昨秋、PAMSでの「Korea Japan Meeting」で出会った札幌の劇場、コンカリーニョの斎藤ちずさんと韓国の劇団 Corporal Theatre Momggollは、7月にコンカリーニョで公演を行うことが決定しました。

見本市を通しての日韓交流はまだ始まったばかりです。モノの売買とは違い公演の実現には時間が必要ですが、「Korea Japan Meeting」から生まれた日韓舞台芸術関係者ネットワークは少しずつその成果をかたちにしています。今後は公演の実施のみならず、お互いの国の舞台芸術をめぐる環境を知ることができるミーティングや施設訪問なども視野に入れて、舞台芸術から広がる日韓の交流を継続していきたいと思っています。

PROFILE

くぼた なつみ

2000年よりダンス公演の制作を始める。フランス・ダンス・03に参加後、05年より東京芸術見本市事務局にて主にセミナーのプログラムを担当。国内の公立文化施設担当者同士、さらに国内と海外の舞台芸術関係者とのネットワーク作りを模索中。

舞台「レディ・マクベス」
撮影者・宮内勝



先日、日本から来た友人を案内して、ピマッコルを歩いた。光化門にある教保生命ビルの裏側の細い路地。入ってすぐ左にはピンデトックで有名な「ヨルチャチブ（列車チブ）」、その先には軒下で魚を焼く大衆食堂が数軒続き、三叉に分かれた路地はさらなる迷路へと人々を誘っている。

李朝時代の裏通り

ピマッコルとは「避馬コル」と書く。李朝時代、鍾路は王族や高級官吏の通るメインストリートだった。当時、人々は自分より高位の人を見たら道の両脇にひれ伏し、行列が通り過ぎるのを待たなければならなかった。これでは、おちおち道も歩けない。そこで、「高位の人の馬を避ける」ための裏通りが作られた。鍾路一街から東大門まで、ピマッコルは鍾路にびったり沿ってつながっていた。

「今はその一部のみが残っています。ほら、こことここ」

友人と一緒にピマッコルの案内板を見ていたら、通りがかりの近所の人が説明してくれた。でも、彼が指差したうちの教保生命ビルの裏側部分は、いまや風前の灯だ。ここを含む清進洞一帯の再開発が決まり、すでに不動産業者は80%以上の買収を終えているという。商店なども閉店の看板をかけ始めており、街は淋しさ色に覆われている。

「ピマッコルの跡地にはツインタワーが建つそうですよ」

まるで他人事のように、その人は言った。



南道食堂

韓一館

ここはうまいんだよ

路地の中の三叉路を左に進む、また右に折れる、と小さな看板が目に入る。「ナンドシクタン（南道食堂）」。この食堂を訪れるのは15年ぶりだった。90年代初頭、ソウル在住の日本人男性らに誘われて数回訪れたことがあった。

「ここはうまいんだよ」

色も形もバラバラのテーブル、斜めに傾いたむき出しの厨房。店の傍らに積まれた座布団を配りながら、案内してくれた人はニコニコしながらそう言った。でも、あの頃の私ときたら他のお客さんの大きな声や、他人と同じ料理をつつくことなどが気になって、食事をしっかり味わう余裕がなかった。

「ああ、ここはこんなにも美味しかったんだ……」

15年ぶりに知ったうまさにじ〜んときた。でも、記憶を補完したところで、後の祭りだ。店は年内の立ち退きを迫られていた。

「大家はさっさと店を売って、どこかに雲隠れしてしまった。私たちに事後通告だけだったよ。45年も店をやってきたのに。これからどうしていいのか……」

新しく建つビルは家賃が高くて入れないと初老にさしかかるアジュモニは言う。痛恨だった。15年間も忘れていたなんて。それが原因ではないにしろ、店は目の前でフェードアウトしていこうとしているのだ。

失われる街角

消えるのは南道食堂だけではない。今回の再開発では、創業70年のヘジャンクックの老舗「清進屋」や、ブルコギや韓定食で有名な「韓一館」、また



ピマッコル

日本人観光客も多く利用したソウル観光ホテルなども移転・廃業の憂き目にあう。

韓一館にも行ってみた。1939年創業、李承晩、朴正熙から盧武鉉まで、歴代大統領のご用達として知られてきた老舗だ。こちらやはり10ナン年ぶりだ。初めてソウルに来たときに、韓国人の知り合いに連れて行ってもらった記憶がある。こちらは南道食堂とはちがって、完全な接待用だ。オーソドックスなブルコギはやはりおいしい。でも、驚いたのは冷麺だ。

「こんなに美味しかったなんて……」

あの頃は冷麺の味がわかってなかったのだ。さいわい、この店は5月末に一度閉店するものの、ソウルの江南に場所を移して営業を再開するという。また、清進屋も近隣への移転が決まっているという。ソウル観光ホテルに関しては、友人や知り合いにたくさんお泊りいただいたので後悔はない。

唯一、南道食堂だけが、心にひっかかっている。

PROFILE

いとう じゅんこ



1961年愛知県生まれ。フリージャーナリスト。愛知大学文学部中国文学科卒。1990年に渡韓。テレビ番組の制作、新聞社勤務などを経てフリーに。著書には『ピンバの国の女性たち』（講談社文庫）、『もう日本を気にしなくなった韓国人』（洋泉社新書y）などがある。

約3000年前の朝鮮半島と日本列島

水田とそこから収穫される米は、長く日本列島に住む人々の生活と文化を支えてきた。水稲農耕が日本列島に伝わったのは今から3000年ほど前であり、朝鮮半島から持ちこまれたと考えられている。そして、水稲農耕の本格的な開始を契機として縄文時代が終焉し、弥生時代が始まる。その弥生時代には、水稲農耕に伴ってそれまでにない多数の文物が日本列島に現れ、さらに、埋葬の方法、祭祀の道具、装身具などの精神的な面まで刷新される。後世の「文明開化」にも匹敵する大きな文化的変革があったのである。

一方、当時の朝鮮半島は青銅器時代であり、日本列島より早く農耕文化を

開始し、大変な人口増加の時期を迎えていた。数メートルもの巨石を埋葬施設の上に置く支石墓、石で立派な埋葬空間をつくる石槨墓なども現れ、一定の社会階層も認められる。そのような有力者の墓には、しばしば緑色に輝く碧玉（jasper）製の管玉（写真1）が副葬された。これこそが、弥生文化の開始期に日本列島に伝わり、その後、1000年以上にわたって、日本列島の広い範囲で愛好される装身具である。朝鮮半島では長さが最大12cmのものがあるが、日本列島も含め、1cm程度のものが多く、一つ一つはそれほど目立つものではない。しかし、これが当時の朝鮮半島内部の流通、日本列島への文化伝播について、多くのことを教えてくれるのである。

管玉の理化学的分析

さて、当時の朝鮮半島で約2000点、日本列島で約600点ほど出土している碧玉製管玉であるが、現在までのところ、朝鮮半島では材料の原産地は発見されていない。これに対し、日本列島では日本海側の地域を中心に20カ所ほどの原産地が発見されている。

一方、碧玉を蛍光X線分析すると、特定の元素が異なる比率を示すため、製品から原産地を特定することができる。ところが、弥生時代の初めに現れる碧玉製管玉を分析してみると、日本列島のどの原産地にも一致しない。これらの玉は、当時の文化的経路から朝鮮半島から持ち込まれたであろうことが予想されるが、韓国の出土品を分析のために日本に持ってくるのができないため、それを証明するのは困難であった。

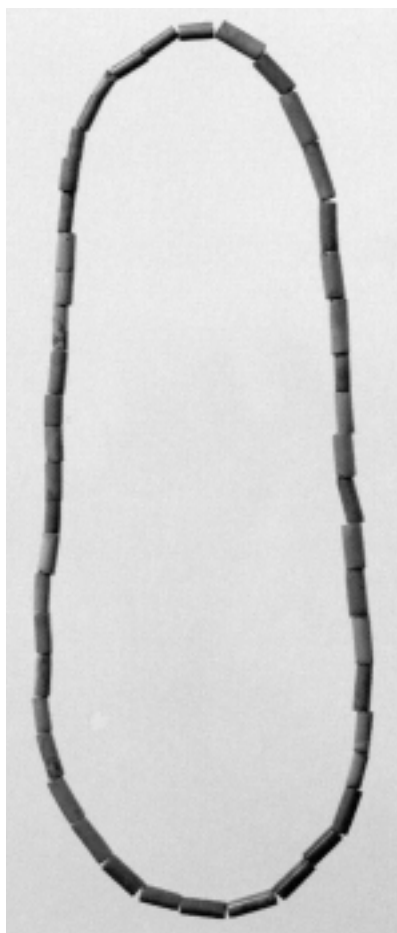
そこで韓国の所蔵機関の先生方のご協力のもと、理化学的分析を専門とする協力者とともに蛍光X線分析装置を韓国へ持ちこみ、機材を積んだ車で各所蔵機関をまわって分析を行った。夏の炎天下ということもあり、大変な調査であったが、苦勞に報いる興味深い成果を多く得られた。今回は、そのうちの二つについて話したい。

人と物の移動

まず一つ目として、朝鮮半島の青銅器時代の碧玉製管玉は、日本列島の弥生時代の最初に現れたものと一致することがわかった。これまで考古学や形質人類学からこの時期に朝鮮半島から移住があったことが推測され、それは半ば常識化していたが、理化学的な裏付けが得られたのは今回が初めてである。玉類は朝鮮半島でも階層が高い墓に多いので、その風習を受け入れたか、まとまった移住があったことが予想される。

もちろん、前述したように朝鮮半島では原産地は発見されていないため、それを探求する必要がある。しかし、朝鮮半島では管玉の数量も多く、サイズも大きいので、今回の分析結果をあわせれば、ここでつくられ、日本列島に持ちこまれたという考えは、かなり確実性が高くなったといえる。

二つ目は、現在の大田などがある錦江流域から大邱のある大邱盆地まで同一の碧玉製品が流通していたことがわかった。この二つの地域は200km以上の距離があり、最大かつ多量の管玉が出土した現在の慶尚南道にある南江流域で生産されたと仮定すれば、半径200kmの流通網を推定することができ



〈写真1〉碧玉製管玉

る。さらに、日本列島でも九州地方は弥生時代の開始以後、恒常的に同じ原産地から採集された碧玉が入ってくるため、この地域を含めれば、半径400kmほどの流通網の存在も考えうる。こうした交易活動を通じて、人々はさまざまな地域の情報を手に入れていたのだろう。

海を越えた交流と精神活動

朝鮮半島の青銅器時代、日本列島の弥生時代に流行する管玉は、元々は中国東北地方や山東半島の新石器時代からみられ、軟玉（nephrite）製の淡い緑色や白色のもの、緑松石（turquoise）製の深い青色をしたものが起源であると考えられる。それが、中国の青銅器時代に山東半島、遼東半島で僅かに碧玉製のものが出現したのち、朝鮮半島の漢江以南を中心に爆発的に増加する。このとき、色調も緑色を中心になるとともに、ときには深い青色や緑色の天河石製（amazonite）の勾玉、小玉とセットとなる。これらが当時の朝鮮半島の代表的な色といえ

よう。中国大陸では透明感のある淡い緑色や白色が貴ばれたのに対し、朝鮮半島では透明感のない淡緑色もしくは緑色が好まれたことから、装身具に対する好みの差異が認められる。

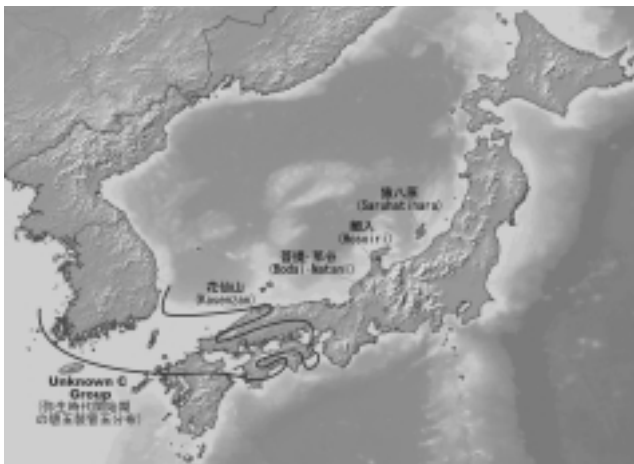
当時の装身具は単なる装飾品ではなく、魔除けなどの信仰的意味も持っていたと考えられるため、玉の好みの差異は深い部分での価値観や思想的側面の差異にも通じるのではないだろうか。そう考えると、交易も単なる経済的理由で行われていたのではなく、精神的活動も含めた文化的要因で行われていたと想像できよう。加えて当時から朝鮮半島と日本列島は異なる文化を持っていたものの、人々は交流し、思想的な共通性も持っていたことがわかる。



〈写真2〉湖西考古学会での成果報告

に生きる文化の成り立ちを明らかにとする。各地域の民族性や国とその文化を理解することで、お互いをより尊重する一助となるだろう。

博物館になにげなくおかれているようにみえても、そこに展示されているものは、そのようなことを私たちに教えてくれるのである。最近では、経済的問題から、大阪府で博物館を統合や廃止する動向がみられる。文化教育を徹底させてこなかった点には非があることは否めないが、人や文化を理解する場を失っては経済的な成功も困難であることを忘れるべきではない。

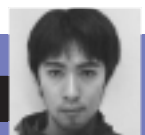


玉の主要原産地と最初の管玉の分布図

考古学では管玉のような一見、地味で小さな遺物を取りあげるが、そこからわかることは、海を越えた当時の交流と精神活動にまで広がる。そして、それぞれの文化の差異と共通性、時代の流れを理解し、現在

PROFILE

なかむら だいすけ



大阪大学大学院文学博士。岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助手を経て、2007年4月より高麗大学校考古環境研究所訪問教授（2008年2月まで訪韓フェロー、4月より日本学術振興会海外特別研究員）として研究を行っている。

脱工業化と都市空間の変化

70年代から先進国の巨大都市では、工場閉鎖、人口・雇用の減少、財政危機、犯罪率の増加、貧困、インナーシティなどの現象が現れ、「都市の衰退」(urban decline/decay)という言語が氾濫し始めた。こうした現象は、80年代以降、日本を含む先進資本主義工業国を支えた経済-社会体制が「脱工業化」(restructuring)していく中で起こり始めた変化であると考えられる。このような都市問題は、90年代以降、韓国のソウルや釜山などの大都市でも起こり始め、アメニティや水辺空間などと連結した都市発展のための多様なイベントやフェスティバルなどが日本から輸入され行われるようになった。私はこのような一連の変化を見ながら東京の動きに関心を持ち始めた。

「世界都市」と都市再開発のブームへ

20世紀後半から世界の経済システム

は、知識情報・金融サービス産業を中心としたシステムへ変わりつつある。特に、ニューヨークやロンドン、そして東京では、国際的な金融ブームを背景とした、法人本部複合体の集積など、中核管理機能を目指す「世界都市」(world/global city)という概念が新たに登場するようになった。この時期は世界都市化を狙う都市間の競争が激しかった時期であり、規制緩和や税の軽減等の優遇施策を中心とする民間主導の「都市再開発」が始まった時期でもある。

「国際化・情報化・ハイテク化」というキーワードを中心に、都心部では人口回復や居住などを目指した「アーバンルネサンス」、「都市再生」、「都市回復」などの再成長の動きも活発化した。中央・地方を問わず、財政危機が最大の懸案となり、市場重視や小さな政府などを目指したイギリスのサッチャリズム、アメリカのレーガノミックス、そして日本の中曽根政権が成立し、規制緩和・民間活力を両軸にした「新自由主義」(Neo-liberalism)が始まった。

日本国内においては、1980年に都市

再開発法が改正され、大都市自治体による「都市再開発方針」の策定が義務づけられ、また再開発の施行条件が緩和されるようになった。1981年には、「臨時行政調査会」(第2次)が約15年ぶりに設置され、「民間活力の公共事業への導入」が最大のテーマとなった。しかし、1985年の「プラザ合意」以降、内需拡大策として、貿易自由化・経済国際化のために選ばれた「都市再開発」は、土地バブル・バブル経済が弾けた後、「失われた90年代」と呼ばれる長期不況や不良債権問題といった政治経済の混乱をもたらした。

消費される世界都市、その景観と文化

「世界都市」の「建造環境(built environment)」とは、どういう景観として現れているのか。おそらく、超高層のオフィスや集合住宅、24時間常に移動できる国際空港、高度の情報インフラ、集客力のある都市型リゾート、多様なメガ・プロジェクトなどが最初に思い浮かぶ景観であろう。

特に、イギリス・ロンドンのテムズ川南岸の再開発エリアであるドックランド(Dockland)、アメリカ・ニューヨークのマンハッタン最南端のバッテリーパーク(Battery Park)、そして日本の臨海副都心という「ウォーターフロントと公共建築」の開発プロジェクトは、世界都市のイメージを獲得しながら、相次いで誕生した<写真1>。そして、日本の都心部でも六本木ヒルズ、新丸ビル、汐留地域といった大型複合施設が相次いで建設され、オフィス拡大などの再開発事業が次々に行われるようになった。

(写真1) ウォーターフロント、お台場―消費空間と公共建築
(08年3月22日撮影)



研究 ―東京の軌跡と行方を辿って―

ソウル大学校社会科学科博士課程修了 金銀恵

80年代以降というのは都市計画と建築がドラスティックな親和力をみせた時期でもあり、景観やライフスタイルの世界都市間（例えば、マンハッタンなど）比較も盛んに行われた。アジア各国からの移民者、観光客は、「夢の空間」としての東京の景観やイメージなどを消費し始めた。こうした過程は、マスコミやガイドブック、雑誌、ドラマなどが提供するイメージや記号で構築された「観光のまなざし」（tourist gaze）による消費でもあった。東京研究の中でも「消費空間」に関する多様な分析（建築、広告・メディア、「趣都（秋葉原研究）」など）が行われたことはもちろん、方法論的に多様な実験（VR、GIS、GPS、デジタル、空撮など）を通して、新たに登場する景観の変化を論じる研究もブームになっている。

しかし、都市文化が持っている自生的な生産力を無視したまま、競争的に造られた世界都市の景観は、どこの都市の景観も類似してしまう傾向が強くみられる。世界都市が差別化戦略を取ればとるほど、その場所はいつかどこかで見たような場所になってしまう場合も少なくない。このような限界を乗り越えるため、最近東京では政策として自生的に成長していく都市文化の想像力豊かなイベント「ヘブンアーティスト」や、若手アーティストの発掘、魅力のある場所とイベントの連結「トーキョーワンダーサイト」を通して東京の魅力を全世界に発信しようとしている。更に、工業化過程で残された工場や倉庫の跡地を積極的に映画やドラマなどの撮影地「東京ロケーションボックス」として活用するなどさまざまな変化が起きている。



〈写真2〉三田小山町と麻布十番の間、混在する都心の景観
―「東京さぬき倶楽部」の屋上から（08年3月28日撮影）―

「世界都市」の光と影、高級化と分極化

このような変化を経験している「世界都市」にはどのような人々が住んでいるのだろうか。金融サービス産業を担当している中産階級の人々が作り出したライフスタイルによるファッション、芸術、観光、カルチャーなどを通して、「ジェントリフィケーション（住居階級の上昇・高級化）」（gentrification）が始まり、文化・創造産業の重要性も高くなりつつある。しかし、同時にこうした企業・個人向けサービス産業は、都市型工業の領域を支える低賃金労働者（非正規就業者、外国人労働者など）を生み出し、「世界都市」は社会階層の分極化が現れるようになった。いくら有名な観光地や場所で写真を撮っても、フレームの中にホームレスの姿が入ってしまうことは、東京だけの問題ではなく、どこの「世界都市」でも見られる現状であるだろう。

2000年代以後、東京の都心でも「ジェントリフィケーション」の動きや変

化が少しずつ現れている。現在、再開発中の空間では、超高層ビルのグローバル・エリート、住商混合地域の住民、そして、インナーシティに住む外国人住民が〈写真2〉のように共存している。「世界都市」は、金融ブームと製造産業の衰退、中産階級の繁栄と下層階級の格差構造という明暗の両面性を持つことで、「分裂都市」（divided city）という批判の声も高くなっている。果たして、共に模索できる都市コミュニティとはどのような形であるのだろうか。新たな都市に応じた都市制度や慣用の文化を整えることこそが、未来の東京の行方を決めるのではないだろうか。

PROFILE

キム ウンヘ



ソウル大学校社会科学科博士課程を修了し、博士論文の執筆のため、日韓文化交流基金のフェローとして2007年10月より来日。現在は、一橋大学大学院社会学研究科で「都市再開発と文化戦略」をテーマとして、主に空間文化の生産と消費過程の研究を行っている。研究方法論として映像分析にも関心を持っている。

日韓文化交流基金事業報告

このコーナーでは、今後、四半期ごとに当基金の事業報告をしていきます。本号では、2007年度第4四半期（2008年1月1日から3月31日まで）の実施事業を紹介します。

1 青少年交流事業

訪日団

団体名	団 長	計	男	女	期 間	訪問校
釜山青年訪日研修団	金玄淑 東亜大学校音楽学部 教授	29	8	21	1/8-1/17	立教大学、島根県立大学
済州青年訪日研修団	李相哲 済州大学校社会学科 教授	29	9	20	1/8-1/17	東洋大学、大阪市立大学 関東国際高等学校、 京都学園中学高等学校
ソウル青年訪日研修団	<文化行事グループ> 李鎮夙 韓日文化交流会議 事務局員	12	4	8	1/22-1/31	東京学芸大学、松山東雲女子大学
	<日本語教師グループ>	6	1	5		国際交流基金日本語国際センター、 埼玉県立南稜高等学校
	<高校生グループ> 姜徳元 国立国楽高等学校 校長	12	1	11		都立狛江高等学校、 和歌山県立大成高校美里分校

訪韓団

団体名	団 長	計	男	女	期 間	訪問校
日本大学生訪韓研修団 (第1団)	大畑裕嗣 明治大学文学部 教授	20	6	14	3/4-3/13	慶熙大学校、忠南大学校
日本大学生訪韓研修団 (第2団)	月脚達彦 東京大学大学院総合文化研究科 准教授	20	6	14	3/18-3/27	高麗大学校、嶺南大学校



釜山青年訪日団
島根県立大学で和菓子作りを体験する



嶺南大学校でホストファミリーと交流する日本大学生訪韓団(第2団)

2 学術定期刊行物助成

人文社会科学分野の学会・研究会の研究成果として刊行される学術定期刊行物を支援する事業です。2007年度助成対象の現代韓国朝鮮学会により、右記の図書が刊行されました。



「現代韓国朝鮮研究
第7号」
(現代韓国朝鮮学会編、新書館)

3 報告書

以下の報告書が完成しました。これらの報告書は基金図書センターにおいて閲覧が可能です。

訪日・訪韓フェローシップ

- 訪日学術研究者論文集 第十四巻（2005年8月～2007年3月）
- 訪韓学術研究者論文集 第八巻（2006年4月～2007年2月）

青少年交流事業

- 日本大学生訪韓研修団＜外交通商部招聘＞（2007年10月30日～11月8日）報告書

4 日韓ボーイスカウト交流事業

（財）ボーイスカウト日本連盟へ委託している「日韓ボーイスカウト交流事業」が行われました。2007年度は韓国ボーイスカウト153名（スカウト132名、指導者21名）が、1月12日（土）から21日（月）までの9泊10日の日程で訪れました。日本滞在中は日韓スカウトフォーラムのほか、長野でのウィンタースポーツ体験、京都市内見学や関西地区でのホームステイなどを通じて交流を深めました。



長野でスキーの体験をするスカウト

5 維持会員

2008年1月1日～3月31日の期間に、特別会員1名、個人会員6名の方に維持会員制度にご加入いただき、11万円の会費収入となりました。皆さまのご厚意に深く感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。

個人 6名

浅野豊美 小倉紀藏 菅野修一 坂元茂樹 尹明憲 和田とも美

特別 1名

藤村正哉

訂正

日韓文化交流基金NEWS第45号10頁「2008年訪日・訪韓フェローシップ採用決定」一覧リストにおいて、訪日採用者No. 9の呉允禎氏は辞退されましたので、17名の採用者となりました。

「21世紀東アジア青少年大交流計画」日本大学生訪韓研修団2008年度参加者募集

日本大学生訪韓研修団派遣事業は、世界的視野に立った新しい日韓の友好親善協力関係を構築するため、日韓両国政府が協調し、今後拡大していくべき交流事業として策定されたものです。このたび、以下の要領で研修に参加する学生36名を募集します。

「21世紀東アジア青少年大交流計画」(JENESYS Programme)

「21世紀東アジア青少年大交流計画」は、平成19年度、日本政府により立ち上げられた事業です。大規模な青少年交流を通じてアジアの強固な連帯にしっかりとした土台を与えるとの観点から、東アジア首脳会議参加国を中心とする青少年を5年間、毎年6000人程度日本に招へいするほか、派遣や様々な交流事業も実施されています。

●日程

Aコース	事前研修会	2009年3月2日(月) 14:30より
	訪韓期間	2009年3月3日(火)～3月12日(木)
Bコース	事前研修会	2009年3月16日(月) 14:30より
	訪韓期間	2009年3月17日(火)～3月26日(木)



●研修の目的

韓国に対して深い関心を持つ日本の青少年を韓国に派遣し、韓国の生活や文化に触れることを通じて、韓国への理解と交流の増進に寄与することを目的とします。

●派遣人数

各20名(団長1名、事務局1名、学生18名)



●研修内容例

1日目	到着(仁川国際空港着)、市内見学
2日目	特別講義、歓迎昼食会、伝統文化体験
3日目	大学訪問(ソウル市内または近郊)
4日目	軍事境界線付近見学(板門店、統一展望台等)
5日目	地方へ移動、ホームステイ
6日目	ホームステイ
7日目	大学訪問、慶州地域見学
8日目	慶州地域見学
9日目	釜山市内見学
10日目	帰国(釜山・金海国際空港発)

*ホームステイは1名1家庭の受け入れとなります。
*訪問地は諸事情により変更することがあります。

●応募方法

(財)日韓文化交流基金ウェブサイト(<http://www.jkcf.or.jp>)からオンラインでお申し込みください。

●募集締切

2008年7月18日(金)午後5時締切

*選考の結果は、9月上旬頃、応募者全員に郵送で通知します。

*詳細は当基金ウェブサイトをご覧ください。